ボードレールからシュールレアリスムまで

著者——マルセル・レイモン
訳者——平井照敏
発行者——小田久郎
発行所——株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三—十五電話二六七・八一四一　振替東京八一二一
印刷——渡辺印刷
製本——美成社
一九七四年十二月十日初版発行

ボードレールから
シュールレアリス
ムまで
思潮社刊
定価三八〇〇円

ボードレールからシュールレアリスムまで

マルセル・レイモン著
平井照敏迟

思潮社

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

緒言——7
序説——9

1　逆流

第一章　象徴主義に関する考察——51
第二章　ロマヌス主義と本然主義——61
第三章　わかい世紀の詩——77
第四章　南部の詩の覚醒——95
第五章　兜をかぶったミネルヴァ神の指標のもと——107

2　あたらしいフランス詩の秩序をもとめて

第六章　新象徴主義——129
第七章　古い美学と新しい美学——147
第八章　ポール・ヴァレリーまたは象徴主義の古典——175
第九章　ポール・クローデル、全体世界の聖歌隊員——195
第十章　善意の人々の詩——219

3　冒険と反抗

第十一章　あたらしい詩の起源　ギョーム・アポリネール——245
第十二章　行動と近代生活の詩にむかって——271
第十三章　自由な精神の遊び——287
第十四章　ダダ——307
第十五章　シュールレアリスム——325
第十六章　シュールレアリスムの詩人たち——345
第十七章　シュールレアリスムの周辺——365

現代の詩の神話——389

エピローグ——407

原註——421
解説——444

裴頠——田辺輝男

緒言

緒言　この本のなかにしだいにその構図をあらわしてくるが、一本の作用線があって、ロマン主義以後の詩の動きを支配しているとわたしにはおもわれた。ポエジーをその本質においてとらえようとする近代人の主要な野心の働きに応じてこの本の各章は配列されている。ここには、今世紀の所産の完全な一覧表も、肖像画廊ふうのものも、ぜんぜんみられないだろう。わたしが尊重し、この本のなかに好んでとりあげさせていただいた詩人たちに、この点についてお許しをねがいたい。

わたしの判断に偏重があるとして非難されるなら、わたしは、自分を弁護するために、あらゆる場合に、ポエジーの味方であろうと努めたとこたえておこう。

序說

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序説

I

今日ひとは『悪の華』を、現代の詩の運動の生きた源泉のひとつとして考えることに意見が一致する。第一の糸、即ち「芸術家」の糸は、ボードレールからランボーへ、次いで最近あらわれた冒険の探究者たちへ通じている。この見方は、全く近似的ではあるが肯定できる。十九世紀後半の大抒情詩人たちは、かれらの野心のほとんど破れかぶれの大胆さによって、かれらの詩篇のあるものの閃光を発する美によって、――かれらの人間像の魅力はいわなくとも――今もなお、逃れ難い魅惑の力をふるっている。しかしながら、現代の詩の起源を求め、その企ての根本的方向を明らかにしようとするものは、ボードレールやユゴー、ラマルチーヌをこえて、更にヨーロッパのプレ・ロマン主義にまでさかのぼらねばならないだろう。

反宗教改革やバロック芸術の時代に於て、非合理なものの爆発が先ずおこった時には、教会は、たいして苦労もせず、神秘的な圧力をさし向けたのであった。二世紀たって、「自由思想家たち」の批評がでたあとでは、教会はもはやそうすることができなかった。それまでは、宗教の力でうまく悪魔ばらいすることができた人間的要求の幾つかを満足させるのは、芸術の（といって芸術だけではないが）仕事になった。

それ以後、詩は、倫理学、あるいは、正式なものではないが、なにかある形而上的な認識の手段となる傾向がある。ある必要が詩をしてランボーが望んだように「生をかえ」させ、人間をかえさせ、そして人間を存在に触れさせる。ここにある新しさは、少しずつ無意識からあらわれて、漠然とした力をとらえ、自我と宇宙の二元論に打ち勝とうとする、事実よりはむしろ意図である。なぜこの意識が歴史上のかなりはっきり定まった時期に、即ち十八世紀のおわりに目覚めたかの理由をたずねようとする場合には、その答えをとり出すために、近代文化における作家と詩人の位置を検討せねばならないと思う。もしこの文化が――様々な点で、百科全書のうちに、始めてその通俗的表現を見出した主義主張ある文化が――ロマン主義とまさしく同時代的な所産であるとするならば、それは偶然であろうか。その時以来、この文化は宇宙と生の合理的実証的な概念に基づいて、たえず一層強固に確立された。そして、人間精神におよぼすその拘束力、即ち無意識に向けられた一種の無訴権の終了は、日々にますます激しい力をもつようになった。この文化は人間を宇宙から、また人間自身の一部から、理性に従属せぬ力が宿っているあの部分から、切りはなしたゆえに（しかもそれは、キリスト教がひとびとの魂のうえにその王国を失い、魂に個人的礼拝の道を与えるのをやめた時であったが）、この文化は、魂の要求全体と人間に分け与えられている制限された実存との間の当然の不調和を、ほとんど堪えがたいまでに助長したのであった。

それゆえ、この時期から詩人たちは、詩的行為を生命の作業にしようと努めれば努めるだけ、我々の社会の中で、ひとつの補償的機能を果しているように思われる。ゲーテが「母たち」と呼んだものとの交流を確立するために我々に与えられている手段の一つが詩であるならば、詩は永続的な人間の使命をこれこれのものと明らかにする。しかし、ひとが「現実」しか知らないと公然と主張し、この使命がたえず妨げられている時代には、無意識から意識への移行は、常ならぬ様相によってなされるであろう。そして完全な実存の要求は形而上学的要求のすがたをとるだろう。

こうした運動が先ず、Aufklärung（啓蒙思想）の合理主義に対してあらわれ、そしてはっきりした、しかし、同じ方

向の、一連の個人的経験が、ノヴァーリス、ジャン・パウル、ホフマン、アルニム等の名前をもち、そしてヨーロッパの空にドイツ・ロマン主義の神話的様相を形成するあの異様な賞讃すべき作品を生み出したのは、ドイツの地である。――そしてフランスでは、アルベール・ベガンの偉大な書物があらわれて以来、どんな条件で、しかもどんな豊かさでそれがなされたかがはっきりと知られている。――記憶のために、同じ見通しのなかに、大英帝国の詩人たち、即ち幻視家ブレイクからコールリッジ、シェリー、ポーまでをならべよう。

しかし我々のデッサンは、ここでは歴史的な部類のものではない。我々は原因から結果への関係を決定したり、親子関係や影響関係をはっきりさせる必要はない。我々に問題なのは、特権をうけたいくつかの存在が過去に加わり、現在加わっている、ある冒険、またはあるドラマの本質的な主題を、はっきりとみることである。問題なのは、精神の面のうえに、理想の系列、即ち、その間に神秘的な統一が明らかになるような努力と熱望の全体を描き出すために、歴史を通じて発展し、人間の持続時間にその達成の場と可能性を借りうけている弁証法という前提を記すことである。

ここで我々がフランスに、ルソーに向き直るとしても、それはかれのうちに現代詩人の先駆者や先生をみとめるためではない。ジャン・ジャックは、無論、マージ教僧侶、自信満々たる形而上学者といったものではない。しかしながら、先ず、大変特別な精神的、神秘的風土があらわれるのはかれの所である。その諸関係を破り、そして詩を**生命的**行為とするために精神の努力を扶けるのは、ほかならぬかれである。

かれが『孤独な散歩者の夢想』の第五の散歩の中で述べているように、ほとんどすべての絵画的なものをはぎとられ、その最も高い力に達した自然の感情――事物と事物を同一視し、その代りに、夢想家の「感覚を傾注し」て、その無意識の力を所有するようになった、**自我**――は、精神と世界との前進的な融合から生まれ出るように思われる。主観的なものの感情と客観的なものの感情との間に境界が、消えうせる。宇宙は精神により制御されるようになる。思想はすべての形式、すべての存在に**あずかる**。(原註1) 風景の動きは知覚される、またはもっと適切には、内部から感覚さ

れる。即ち、「波の響きと水の動揺」、潮の干満が、こころのリズム、血のリズムともはや区別のないリズムを生み出す。しかし間もなく、自分にかがみこみ、自己の中心にすっかり集中したナルシスは、もはや己れを見つめる欲望さえももたなくなる。ただひとり、その恍惚状態のうちに、実存の混沌とした甘美な感情が生きのこる。「このような状況にあって、ひとはなにによって楽しむのか。それは自己の外部の何ものによってでもなく、自己自身及び自己自身の存在を除いた何ものによってでもない。この状態が永続する限り、ひとは神のように自己自身で十分である。」それはつまり、ひとがあらかじめ世界に対立することをやめたということ、及び、自我の感情と全体の感情がもはや識別されないということである。自然な神秘的経験だ。ルソーが神と名づけつづけるこの「偉大な存在」、それはかれが自己のうちに満潮のように感じている宇宙的、内在的な生命である。(なるほど、もしかれがこの生命のうちに消え去ることを受けいれるとすれば、それはこの無限体の水脈のすべてがかれのこころに達しているようにかれに思われるからである。)

この「完全にして充分な」それ自体として言いようのない幸福の状態はまた束の間のものでもある。その消滅は人間に、その限界と不安定な生の条件との、一層生き生きとした意識をのこす。人間は改めて楽園の扉を押しやぶるのでなければ休息をもたないであろう。その代りに、これらの啓示から利益をうるのでなければ休息を見出さないだろう。恍惚の間に、ことばは逃げ去る。だが恍惚の思い出はことばをよびおこす。波濤のうえの水泡のように、イマージュがきらきら輝く。魂のあそびだ。だがそれは、どんなに気高くともあそびの活動よりは、一層高められた活動を熱望し、言(ことば)によって、失われた幸福を再び創り出そうと熱望する。そして、その要素を感性の粉末に借りうけているこのイマージュは、外的対象を記述することを機能としていない。その役割は、内的運動を延長し、復原することである。ノヴァーリスはいった。「この幻想の状態にあっては、客体を知覚するのは主体よりはむしろ、逆に、主体の中で知覚されるにいたる客体である」と。すべてのイマージュはひそかに象徴の状態に組織化され、ことばは、事物自体や、ことばが喚起する心理的現実に加わるため、符号であることをやめてしまう。

かくして、自らを認識しようと望む古典主義作家が、内省に信頼し、自己の観察の結果を論弁的知性の平面に転置するのに反して、ロマン主義の詩人は、同時に感情でもあり自我の享受でもある――またひとつの現存物として実感された宇宙感でもある――ことはできない認識というものを放棄し、自分の想像力に、変貌した自分自身の隠喩的象徴的な肖像を構成する任を負わせるのだ。ここにルソーとシャトーブリアンが典型となるこのあたらしい表現様式の本質がある。その外見にもかかわらず、自然で直接的でさえある表現様式であり、言語にその最も古い特権の幾つかをかえすという点で、分析的表現過程よりまさっている表現様式である。――そしてその外見自体は、ボードレールのようなひとが、詩をひとつの「暗示的魔術」とするために利用しようとするものだ。

「その魂を解放する」、「自然の状態」を見出す、というこの希望は、要するになんであったろうか。無意識のなかにのみこまれかけた昔の夢の結果でないとすれば。人間が事物からはっきり区別されていると感ずることなく、合理的な方法全体をはなれて、精神が仲介者もなく、諸現象を統治する、魔術的宇宙の夢でないとすれば。

***

周知のように、一八二〇年と三〇年の詩人たちのロマン主義は、古典主義から遺贈された、考え、書く方法と、ルソーが既に応じていた深部から来るあのよびかけとの間の妥協から生まれている。次いで、ルイ・フィリップ時代の市民的、産業的世界に於ては、役立とうと思わない者は軽んぜられる。最も偉大な人々は、人類に対して有用であろうと望むだろう。同時に、最初期のロマン主義のもうひとつの変貌が、高踏派の叙述的文学を準備した。例えば、ゴーティエが実現するような客観性に達せんと努めるこの詩的絵画は、ルソーやシャトーブリアンが道をひらき、自然と精神との相互透入の感性に基づいてうちたてられた詩とは大分距たりがある。しかし、ロマン主義のこの二つの逸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com